

第3回国際青年友好スポーツ大会にみる 雪どけ期の日ソ・スポーツ交流

— あるレスリング選手のソ連体験 —

梅 津 紀 雄

半 谷 史 郎

Japan-Soviet Sport Exchange in The Third International Youth Sport Games of Friendship

— Soviet Experience of a Wrestler —

UMETSU Norio, HANYA Shiro

はじめに

1950年代、外国に行ける機会が乏しかった時代に、レスリングの国際試合を通じて外国に渡航しようとした若者がいた。パスポート（旅券）すら旅行の度に申請しなければならない時代に、外国を見るためにどんな方法があり得るか。考えた若者は、スポーツに秀で、国際試合に出場しようと決意した。彼の夢は、1957年のモスクワ行きで果たされた。第3回国際青年友好スポーツ大会（III Международные дружеские игры молодежи в Москве）への出場である。

同スポーツ大会は第6回世界青年学生平和友好祭と並行して開催されたイベントであった。友好祭と同様に西側の人々が東側をかいま見る貴重な機会であったが、友好祭とは異なって（少なくとも第3回においては）日本政府もスポーツ界も協力的であり、制服やスーツケースといった所持品が軒並み支給されるなど、さながらオリンピック出場の如き待遇だった。それは、スポーツ交流がイデオロギー的な性格であるはずがなく、社会主義の「悪」影響を受けるはずがないと判断されたからだった。

本論の主人公は、当時明治大学一年生だった石澤二郎選手で、彼は友好スポーツ大会レスリング・フリースタイルのバンタム級日本代表として訪ソした¹。「鉄のカーテン」の向こ

¹ 本稿は石澤二郎氏への聞き取り（2017年11月4日、および2019年4月5日、いずれも石澤氏自宅）、および石澤氏所有の資料に多くをよっている。聞き取り内容に関しては断わりなく引用する。

う側を見聞し、様々な交流を経験した石澤選手の活躍は特に（乗船したモジャイスキー号の発着地でもある）彼の故郷新潟市で話題になり、地元紙を度々賑わせた。本稿では石澤選手の経験を軸として、友好スポーツ大会を同時開催の友好祭と比較しながら、イデオロギー的ではない日ソの文化交流の一局面に迫りたい。

上述の背景から本稿では、1) 友好祭との比較（政治色や待遇）、2) 新潟からみえる点、3) 石澤選手らの経験からみえる点を軸とし、当時の新聞や石澤自身の日記・聞き取りを主たる素材として検討を行う。なお、スポーツ友好祭については現時点で先行研究は皆無であるが、平和友好祭については、若干の先行研究が存在する。それらを踏まえて、我々も独自の成果をすでに公表している²。しかし同論文は友好祭の芸術分野のコンクール参加者という特定の観点から、首都圏からの視点を軸に友好祭を検討したものである。それゆえ、スポーツ大会も含めた実像を広く示すものではない。特にスポーツ大会ではいわゆる旅券闘争がなかった他、様々な待遇が異なっており、友好祭との違いが多く、また両者の代表団の発着の地である新潟港周辺においては独特の交流の様相が観察できるだろう。

1. 友好スポーツ大会と日本

1-1. ユニバーシアードの前史³

スポーツの国際交流の中心は、1950年代においても、もちろんオリンピックだったが、それ以外に東西両陣営が若者を対象とした大規模な国際大会を主催して競っていた。第二次世界大戦以前は、1923年に創設された国際学生連盟（International Confederation of Students, ICS）が1925年のプラハ大会を皮切りに、ローマ（1927）、ダルムシュタット（1930）、トリノ（1933）、ブダペスト（1935）、パリ（1937）、モナコ（1939）と大会を開いてきたが、大戦勃発で中断を余儀なくされた。戦後に共産圏でこれを引き継ごうとしたのが世界民主青年連盟（World Federation of Democratic Youth, WFDY）と国際学生連合（International Union of Students, IUS）だった。47年以降、学生のスポーツ大会を主催し、さらに世界青年学生平和友好祭と並行開催する形で第1回のブカレスト（1953）、第2回のワルシャワ（1955）と友好スポーツ大会を開催した。他方で、西側では1948年に国際大学スポーツ連盟（International University Sports Federation, FISU）が発足し、1949年のメラノでの第1回大会を皮切りに、国際大学スポーツ週間を2年おきに開催した。スターリンの没後（1953）、雪どけ期に入ると両者に歩み寄りが生じ、1957年夏には第3回友好スポー

² 梅津紀雄・半谷史郎「『邦楽4人の会』の誕生：オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭（1957）」『SLAVISTIKA』第32号、2017年、191-212。

³ 国際学生運動の歴史については、Altbach, Philip G. “The International Student Movement”, *Journal of Contemporary History*, vol. 5, no. 1, 1970, pp. 156-174を、ソ連のスポーツ政策の関与については、Riordan, James. “Soviet Sport and Soviet Foreign Policy”, *Soviet Studies*, vol. 26, no. 3, 1974, pp. 322-343を主に参照した。

ッ大会がモスクワで、国際学生スポーツ週間がパリで開催され（パリ大会は世界大学スポーツ選手権と呼称）、いずれも東西両陣営から参加者を迎えた。これをきっかけに、国際学生連合 IUS の友好スポーツ大会が国際大学スポーツ週間に合流する形で 1959 年にトリノで開かれた大会が、今日まで続くユニバーシアードの始まりとなった。

1-2. 世界青年友好スポーツ大会

戦後日本は侵略国として 1948 年のロンドン・オリンピックには参加できず、52 年のヘルシンキ大会から復帰、この前後から各競技が国際試合への出場を再開させた。レスリング界はいち早く 1949 年に国際レスリング協会に復帰し、米国との交流から国際試合を復活させていた。他方で、友好祭と並行して開催され始めた友好スポーツ大会の第 1 回は、上述のように 1953 年のブカレスト大会だった。日本体育協会（体協）はこのとき、友好スポーツ大会は「平和攻勢」の一環であり、政治的色彩が強いとして不参加を決めている⁴。また友好祭についても、当時もともと共産圏への渡航を認めていなかったことや「生命の安全が保証出来ない」ことを理由に外務省が友好祭渡航のための旅券を発給せず、無着成恭（1927-）を団長とする代表団は密航を余儀なくされ、すでに出国していた人々とともに日本代表として参加した⁵。

2 年後はワルシャワで第 5 回友好祭と第 2 回友好スポーツ大会が開かれ、前回と同じく友好祭渡航は旅券が発給されなかったが、スポーツ大会に関しては「ポーランド陸連から「スポーツ大会は平和祭と無関係である」との書信が寄せられたので」渡航が許可された。体操、陸上、レスリングの代表団は 7 月 22 日に出発⁶、レスリングではフェザー級で笹原正三（1929-）が優勝している⁷。このとき、西側では国際学生スポーツ週間がサン・セバスチャンで開催され、日本はそちらにも代表団を送っていた。

この 2 年後に開催されたのがモスクワ大会である。1 月末に招待状が届き、組織が本格化したのは 4 月からだった。4 月 11 日付の読売新聞は、「体操など四種目 50 名 モスクワ青年友好大会へ」として、「今夏モスクワで開かれる第三回世界青年友好スポーツ大会に日本からはホッケー（16）バレー〔ボール〕（10）体操（15）レスリング（10）の四種目、約五十名以内を送ることを決めた」と報じている。

これを受け、モスクワで発行された「第三回世界青年友好スポーツ大会プレティン第一

⁴ 「学生スポーツに赤色攻勢 東欧大会から招待状 西独大会に対抗」『読売新聞』1953年7月8日付。以下、新聞は明記がないものは朝刊とする。

⁵ 「潜入邦人」として、読売新聞は13名の名を挙げており、そのなかにはモスクワ大会でモスクワ放送のスタッフとして関わった河崎保・清水美智子夫妻が、それぞれ「映画俳優」「東京演技集団」の肩書でリストされているのが注目される。1953年11月21日付毎日新聞夕刊によれば、彼らに対して出入国管理令違反により逮捕状が出され、捜索が行われたが、容疑者は帰国していなかったためであろう、「一名も逮捕出来なかった」。

⁶ 「22日に出発 ワルシャワ参加」『読売新聞』1955年7月15日付。

⁷ 笹原は1956年のメルボルン・オリンピックでも優勝した。

号」は「今までに五十ヶ国のスポーツ団体、クラブ及び個人選手が参加を決定した」とし、日本を筆頭として「フランス、オーストラリア、メキシコ、フィンランド、英国、イタリア、スダン、チリー、中共、ハンガリー、印度、ブルガリア、スコットランド、セイロン、レバノン、その他の国」の参加を伝えた。

他方、西側では国際学生スポーツ週間のパリ開催が決まっていた。日本はこちらにも選手団を派遣した。両者を比較した6月9日付読売新聞の記事⁸では、組織によせる「努力と熱意」に相違があり、パリ大会が一人約60万円の派遣費が必要であるのに対し、モスクワ大会は「まるっきりタダ」という点にも表れていることを指摘した。

また、5月27日に正式に決まったモジャイスキー号の新潟への配船の背景として、「一昨年のワルシャワ大会に招かれた日本チームが帰る飛行機も用意していなかった」「という不評を聞いて」の「サービス」だと触れている。だが、モジャイスキー号乗船もすんなり決まったわけではなかった。500名が招待された友好祭代表と同乗することから、「政治的色彩を心配」する声があがっていた。だが、5月19日に、体協が緊急理事会を開き、「その心配なしとして同船に乗船させることに決定した」⁹。

2. 1950年代日本のレスリング文化：石澤二郎の場合

石澤二郎選手は新潟県新潟市の出身で、青物商の実家に五人兄弟の末っ子として、1937年5月25日に生まれた。レスリングに興味を抱いたきっかけは4つ上の兄の影響にあった。当時、新潟ではレスリングが盛んだった。ベルリン・オリンピックに出場し、後に東京オリンピックのレスリング日本代表監督、そしてレスリング協会会長をも務めることになる風間栄一（1916-2001）が早稲田大学を卒業後、新潟に戻って高校でレスリングの指導を行っていた。娯楽が少ない時代とあって、楽しみとしてレスリングを見ていた兄に誘われて足を運ぶうちに、体を動かすのが大好きだったこともあり、「これだったら自分でもできるかな」と思ったという。階級別であるため「背が低い自分にもハンデにはならない」とも考えていた（これは同競技で日本人が短期間で飛躍した要因の一つであろう）。最初は家業の手伝いをするために夜間高校に入ったが、早めに登校した際、後に明大で活躍する阿部や味方、そして中大に進学する中川が行うタックルの練習を目にしたのがきっかけで、レスリング部に入部するために1954年に昼間部に入り直した。入部後はたちまち頭角を現し、1年目に県高校選手権で初優勝し（55キロ級）、高校2年のときに選抜大会、インターハイ、国民体育大会の3つをすべて制覇した。1956年、すなわち高校3年のときは、先輩の笠原茂（後述）の指導も受け、年齢超過で高校生の大会に出られない代わりに、大学の新人戦に出場し、高

⁸ 「盛夏の2大国際スポーツ大会 五輪以上の熱意 モスクワ パリ 共産圏学生も加わる」。

⁹ 「ソ連船でモスクワ行き決定 スポーツ代表」『毎日新聞』1957年5月21日付。

校生でありながら優勝を果たした。「高校生に負けるなんて」と大学の部員たちは叱責されていたという¹⁰。

石澤がレスリングに取り組んだのには別の理由もあった。兄の同級生である笠原茂（1933-1990。1956年、メルボルン・オリンピック銀メダリスト）が、明治大学在学中に全日本選手権を制覇し、アジア大会にも出場していた。こうした笠原を始めとした先人の活躍を目にして、「これをやっていると、オリンピックに出られる。外国に行ける」という意識を抱いたのだという。

それは私の夢だった。小さいときに、とにかく日本から脱出して、客観的に日本を見てみたいという気持ちが、ものすごく強かったんです。そのときは1ドル360円で、行けないですよ。貧乏だったですから。それで今言ったように、先輩たちが世界選手権で世界中回っていたんです。[...] 私だけだと思いますよ。手段として外国に行くには、先輩のように学校でレスリングが強くなれば、日本代表になればいいんだって。どこの国でもいいんだけど、日本を出てみたいという感じがありましたね。強かったです。

当時としてはごく普通のことだが、家族や親戚で外国に渡航した経験のある者はいなかった。その一方で、大学のレスリング部では「先輩たちが」「世界中回っていた」。石澤は「先輩が大勢居ることと質実剛健の校風を慕って明治大学商学部に入学した。高校生時代に見事な戦績を残していたゆえ、当然のように（優先順位一番で）推薦入学した。だが入学当初は良い戦績を残せずにいた。春の新人戦では拓大の安田に敗れ、5月の世界選手権予選でも高比良や島村に連敗して4位に終わった¹¹。春の時点では、大学生選手として特に注目された存在ではなかったと言える。

3. モスクワへの道

3-1. 第3回友好スポーツ（モスクワ）大会予選

石澤がモスクワ大会を知ったのは、入学して「ちょっとたったあと」のことだった。すでに触れたように、当大会へのレスリングの参加は4月10日に決定し、11日には新聞紙上で報じられていたため、レスリング部に伝わっていたはずだ。ただ、確かに外国に行ける貴重なチャンスとはいえ、レスリング界では3月にアメリカ、6月にはトルコで選手権を控えて

¹⁰ 以上は石澤からの直接の聞き取りによるが、『明大スポーツ』（1959/10/24）には少し違う記述も見られる。「中学生の頃ひまさえあれば近くの明訓高校を訪ずれ、レスリングの練習に見入っていたが折から新潟に来た阿部選手（OB）等一行の試合を観戦、男性的な姿に魅力を感じたのがこの道を歩むきっかけとなった」（『月間フラッシュ 全日本レスリング ライトヘビー級優勝 青梅上 パンタム級優勝 石沢二郎』）。

¹¹ 『月間フラッシュ 全日本学生レスリング』『明大スポーツ新聞』第45号（1959）、「話題さらった新鋭レスリングの巻 石沢二郎」『日刊スポーツ』1957年12月5日付。

いたことを考慮すると、他にも国際試合のチャンスがあったので、平和友好祭の芸術代表の選出のような争奪戦とは次元が異なっていたかもしれない。

選考会が行われたのは6月23、24日の2日間、会場は青山のレスリング会館だった。上述したように、石澤は入学直後の戦績が振るわず、下馬評に全く名前が上がっていなかった。彼自身「新潟から出てきた1年坊主が、そんな代表なんかなるはずないだろうという感じだった」と回想する。読売新聞はバンタム級について「〔エントリーしたのは〕八名で世界選手権三位の島村（慶）と寺田（明）が強く、これにOBになってから腕を上げた高比良（中嶋産業）や榊原（中）南（中）がからんでくる。腕力があるうえに对外試合を経験してきた島村に分があるが旅行疲れがとり切れているかどうか？ 八田〔一郎〕会長の長男（慶）も出場するが優勝まではどうか？」として6名もの名を挙げながら、石澤には言及していない¹²。直前にイスタンブールで開催された世界選手権で3位に入賞した島村保行が優勝の筆頭候補だったのは当然だろう（同選手権は6月1-2日に行われ、バンタム級で島村選手が、ライト級で阿部一男選手が3位に入賞した。メダルを8つ獲得したトルコ、および6つ獲得したソ連の存在が顕著であった）。

だが、蓋を開けてみれば「各級とも大激戦」であり、バンタム級の島村は「不調で一敗一引分の後棄権」し、「石沢はクジ運にも恵れて決勝リーグの最終戦に判定で負けても優勝ということになり、最終日を待たずに優勝を決めた¹³。二日目には高比良選手と決勝を戦い、判定勝ちに終わり、最終順位は、一位石澤、二位榊原、三位高比良となった。

25日付の新潟日報は代表の略歴とともに、優勝者のコメントを掲載している。略歴には「明大商学部一年、明訓高出。三十年国体高校五十五キロ級一位、三十一年秋大学新人戦バンタム級に出場一位。得意はスタンドのひねり技」とし、高校生時代の大学新人戦での優勝にも触れている。石澤本人は「不戦勝が多く幸運だった」「ソ連へ行けたら投げ技を学んでこよと思っている」と抱負を述べている¹⁴。他方、当時を振り返って、「ものすごくうれしかったですよ。よっしゃ。これでソ連のモスクワに行けるわという感じで。夢になったかなという感じで。客観的に日本を見ることができると現在の石澤は回想する。

3-2. モスクワ渡航の準備

代表に決まってからは、オリンピック並の扱いになった。プレザーを始めとして、荷物の大部分が支給品であった。石澤選手は日程と持参品について、次のような興味深いメモを残している。

¹² 「国際試合経験者ぞろい モスクワ派遣代表 レスリングきょう選考」1957年6月23日付。

¹³ 「各級とも大激戦 モスクワ派遣 レスリング代表選考会」『読売新聞』1957年6月24日付。

¹⁴ 「モスクワ派遣 レス代表決まる 県出身石沢、大倉、高木も」『新潟日報』1957年6月25日付。

- ・7月 2日 午後二時 パスポート
- ・7月 3日 サイトウスタイルでカリヌイ〔仮縫い¹⁵〕
- ・7月12日 結団式
- ・7月15日 午前7時30分 体協集合
午前9時30分 上野駅発
午後3時15分 新潟着
田中屋旅館 (二) 二九一二〔電話番号?〕
県、市のパター〔パーティ〕
- ・7月16日 新潟港出発¹⁶
↓ 船
ナホトカ
↓ 汽車
ウラジオ〔ストック〕
↓ 飛行機
モスクワ

試合用具 パンツ、トレーニングパンツ、シューズ、サポーター、
ナワトビ、白靴下、バスタオル

その他、靴下

ブレザコート、ズボン二本、Yシャツ二着、下着、セーター、

スリッパ、パジャマ、クツミガキ、化粧石けん、洗濯石けん

洗濯ハサミ四ツ、レ〔イ〕ンコート、フロシキ、ノート、パン、エンピツ

荷物は一八キロまで

ここには記述されていないが、6月29日には「訪ソ日本代表送別試合」として「アマチュアレスリング大会」が北区赤羽小学校校庭で開催され、石澤選手は日体大の柴田護選手と対戦した¹⁷。

7月8日からは中央大学レスリング道場で直前合宿が行われた。トルコ、イランの不参加や「フライ級の諏訪、バンタム級の石沢、フェザー級の矢田、ライト級の大倉らの海外遠征は初めて」だったことから、ソ連選手への対策に重点が置かれた¹⁸。戸張監督は新潟日報掲載の談話で「トルコ、イランなどの強国が参加しないので相手はソ連だけ。ウェルター級の兼子以下の軽量級は全員三位までに入賞、金メダルを取れるでしょう」と期待を述べてい

¹⁵ 体の寸法に合わせて洋服を仕立てる際、前もって体に合わせて簡単に縫って合わせておくこと。

¹⁶ 7月16日出港の旅程は後述するように当初の予定であり、実際には旅券闘争のあおりを受けて、出発は7月19日にずれ込んだ。また乗換地はウラジオストックからハバロフスクに変更された。

¹⁷ 以上は、国会図書館「八田コレクション」所蔵のパンフレットによる。

¹⁸ 「モスクワ行き レスリング 最後の合宿」『日刊スポーツ』1957年7月9日付。

た。これはほぼ達成されることになる。他方、最年少の石澤選手自身は「大学に入ってまだ四ヵ月しか練習してません。それに外国選手とも試合をしたことがないので不安だが、日本でやっているつもりで気楽にやります」とコメントし、「初のヒノキ舞台をなんとも思っていないような口振り。体が柔かく、スピードがあり、思い切った業をかけるので新人とはいえ大いに有望」と評されており、リラックスして臨むことができていた¹⁹。

10日には外務省より62名全員に旅券が発給されることが伝えられ（最終的な渡航者は61名）、7月12日には結団式と壮行会が行われた。この時、戸張監督は石澤について「バンタム級は傑出した選手がいないから、新人とはいえ石沢は練習より試合に強いので望みが持てる」と期待を寄せている²⁰。

恐らくこの頃のことだろう、アマチュア・レスリング協会の会長・八田一朗（1906-83）に連れられて、西洋式の食事に慣れるため、レストランに行き、ナイフ・フォークの使い方から、スープの飲み方まで、指導を受けたことを石澤は回想する。「厳しい指導で、今も身についている」と言う。なお、友好祭の代表団が旅券闘争のさなかだったが、代表としてモスクワに行けることで「舞い上がっていた」石澤は記憶にない。

15日、スポーツ代表団は予定通り午前9時30分発の急行「佐渡号」に乗車し、石澤の日記によれば「国鉄がストライキをやっており」一時間ほど遅れて新潟に着いた。選手団の新潟入りは新潟日報で詳述され、石澤を含めて新潟県出身の選手4名の存在も記述されている。「国鉄闘争のため五十五分遅れて着いた急行「佐渡」から選手たちが紺の背広、胸に日の丸、グレイのズボンといったスマートな姿を見せると、ダイヤ混乱で重苦しい空気のただよっていた駅頭も一瞬明るい表情を取り戻した形だった」と、その華やかな雰囲気伝えていいる。東団長は「スポーツの世界はイデオロギーを超越した世界だ。[...]ソ連スポーツ界が最近驚異的な発展をとげているので、モスクワでは他の国の技術を学ぶとともにこれほどの発展をしたソビエト・スポーツのあり方を中心にみてこようと思う」と抱負を述べている²¹。

3-3. 代表団とモジャイスキー号：新潟での歓待

モジャイスキー号が新潟港に入港したのは翌16日で、「地元労組、青年団体など、代表約200人の歓迎を受けた」と読売新聞が記述した一方²²、地元の新潟日報は「ふ頭には県実行委員会、県労協さん下の団体、県知事（代理）市長（代理）歌声グループ、日ソ親善協会など五百余人がにぎやかに出迎えた」とより詳述している。「インター〔ナショナル〕、トロイカなど合唱が起り、歌声による歓待がはじま」り、「船上と岸壁ではそれぞれお国の民謡を

¹⁹ 「寝技を主体に猛練習 柔軟さみせる石沢選手」『新潟日報』1957年7月11日付。

²⁰ 「ベストを尽してきのう派遣選手団結団式」『新潟日報』1957年7月13日付。

²¹ 「選手団新潟入り モスクワ青年スポーツ日本代表」『新潟日報』1957年7月16日付。

²² 「出迎えのソ連戦 けさ新潟につく」『読売新聞』1957年7月16日付夕刊。

歌い合うなど歌声で満ち、拍手の嵐がその間をつづつた」と友好ムードを伝えている。特に興味深いのは副船長の挨拶で、「これを機会にますます平和のための闘い、原爆反対のための闘いを日本の青年と手を携えてやるとともに、お互いの親善関係を深めて行こう」と友好祭の理念を語っていたことである。日本では友好祭とスポーツ大会は別物とみなされていたが、同乗する船では両者を切り離せるわけもなく、平和と友好という共通の理念の上に乗船していたことになる。

さらに、新潟日報の記述からは、このときの国際交流の経験がソ連に渡航した代表団に限らないことがわかる。モジヤスキー号は16日から19日まで新潟港に停泊し、これだけの客船を見るのが初めてだったこともあるだろう、「新潟市民の関心を集め、港の人気者だった」。「上陸したソ連船員や接待役の婦人たちの行動が、アメリカ人やイギリス人とは一種違ったご愛嬌となり、市民の微笑をさそったようだった」。「ソ連の船員や婦人たちはそろって愛想がいい。一様に堅い表情でムツツリしてみえるのにしゃべりだすと急にニコニコして愛嬌をふりまく」という観察は、「冷たい」対「お人好しのロシア人」というよくある二分法を想起させるものであり、イデオロギーからくる先入観のない、率直な眼差しを見出すことができる²³。

友好祭代表の旅券闘争がギリギリまで続いた結果、出発は最終的に19日となったため、一行は新潟市内の田中屋旅館に宿泊した。これは石澤に幸いし、実家に二泊して、母校の明訓高校で練習を行いながら、乗船を待つことができた。17日には合流して田中屋旅館に泊まり、選手団はバス2台で新潟港に向かい、午前8時から税関手続きを行い、9時半に乗船した。これに合わせて午前9時から「北村知事らが出席して盛大な壮行会が開かれ、選手やこれを見守る体育団体、家族、ソ連船見たさにつどった人たちなどでごったがえした²⁴」。石澤選手自身、地元の高校を卒業して半年も経たぬうちの渡航に「身内も親戚も、何てことだって感じで。何モスクワまで行くのかって。あそこの次男坊がというような感じで。すごい。垂れ幕とかすごかったですよ」と盛大な送迎だった（写真）。読売新聞新潟版は石澤選手の父の言葉として、「父清作さん（六〇）は町内会の人たちに囲まれ「はじめての外国行きなので心配だ。しっかりやってきてもらいたい」とはげましていた」と伝えている他、スポーツ大会代表団は「万歳のアラシで、友好祭代表は「インターナショナルのとどろくなかを乗船した」と、その好対照を伝えている²⁵。



²³ 「人気集めたア号のソ連人」『新潟日報』1957年7月17日付。

²⁴ 「「がん張ってね」の声援 スポーツ代表けさ乗船」『新潟日報』1957年7月18日付。

²⁵ 「友好祭代表へはインター 選手は万歳のアラシでア号乗船」『読売新聞』1957年7月19日付。

3-4. モスクワまでの道中：友好祭との同居と相違

こうして新潟を出港したモジャイスキー号について、石澤は「生まれて初めて」乗った「こんな立派な船」と称える一方で、「パンはかたく味がな」いこと、石鱈は「非常に悪く魚の油で作っているのか匂いが悪い」ことを率直に指摘している。ここには友好祭と友好スポーツ大会という2つの代表団が乗船していたが、彼らを隔てているのは、日本政府から見たイデオロギー色と、それに伴って生じた旅券闘争の有無ではなかった。船室は友好祭代表が一番下の大部屋だったが、スポーツ代表は二人部屋だった。ハバロフスクまでのシベリア鉄道も同道したが、スポーツ代表の2段ベッド4人部屋に対して、友好祭代表は6人部屋だった。石澤は道中でロシア人通訳の助けをかりて簡単なロシア語会話表現を身につけるよう努めていた。スパシーバспасибо(ありがとう)、バジャールスタ пожалуйста(どうぞ)、マースロмасло(油、バター)、クラシーヴァヤ красивая(美しい)といった単語は今も覚えている。

ナホトカだけでなくハバロフスクでも大歓迎があった。「岸総理がアメリカに行ったときのようだった」との石澤の形容が興味深い。ここからはスポーツ代表は全員飛行機であり、先発組をのぞいてシベリア鉄道が続く友好祭代表とは明らかな相違があった。石澤自身は4機のうち最初の1機に搭乗していた。生まれて初めての飛行機で、日記には「広大な草原」など、景色についての記述が多く、「上空から下を見ると箱庭のようで草原はじゅうたんで森林はモグサのようである」「川は帯のごとく思いのまま流れている」といった記述が目を引き、「チタの街を上空で見ると真珠を散りばめたようで非常に美しい」と夜景を率直に讃えている。他方で、当時はシートベルトもなく落ちないか不安だったこと、スチュワーデスの愛想のなさや、給油地のトイレがひどく臭かったことをあわせて指摘している。同じ彼の日記によれば、マグダガチ(アムール州)、チタ、イルクーツク、クラスノヤルスク、ノヴォシビルスク、オムスク、スヴェルドロフスク、カザンを経て22日午後モスクワに到着した。カザンでは「この街だけでなくこの国の人たちは、実によく歌を歌い所かまわず踊りだすといった明るさを待っている」という観察を残している。

4. モスクワでの体験

4-1. 試合開始までの日々と開会式

モスクワではモスクワ大学の寮が宿舎に割り当てられた。いわゆるスターリン様式の巨大な建物について「そこは日本で見るできない立派な建物」と述べ、「食堂は立派で明治〔大学〕の食堂とは比較にならず」と評している。やはりオスタンキノ・ホテル住まいの友好祭代表とは相違があり、諏訪選手の指摘ではバス・シャワー付きだった²⁶(二人一部屋)。

²⁶ 「友好スポーツ大会の印象(車中対談) 諏訪選手 田中選手」『日刊スポーツ』1957年8月28日付。

友好祭洋舞代表として訪ソした薄井憲二の回想では友好祭の食堂では一回だけイクラが出たとのことだが²⁷、スポーツ代表ではビュッフェ形式の食事にキャビアが毎日あったという。

24日の夕食後に矢田選手の誘いで街に出た。初めての個人的な外出で、迷子になった。宿泊先のモスクワ大学を伝えることができず、トロリーバスに乗るよう勧められて乗ったが、大学に向かわないため、一旦下車すると人だかりができた。その中から一人の美しい女性が出てきて矢田選手にペンと手帳を渡すので、Moscow University とローマ字で書いたところ、バスを指差してくれて無事帰れたという。「街は非常にきれいでゴミはなかった」ことも日記に記している。

日本選手は25日から本格的な練習を開始した。「日本チームの人気は体操とレスリング競技に集まり、練習場は賑やかだ」と新潟日報は伝えている²⁸。この日宿舎ではオリンピックのように入村式が行われた他、入場行進の練習が始まった。行進練習をしていたのが日本だけだったところに国民性を見ることができるかもしれない。

ちょうどこの頃であろう、石澤は新潟日報へソ連滞在記を送っている²⁹。赤の広場周辺の繁華街について「まず目立つのは人手の多いことです。東京の繁華街以上の人手で、しかも朝から夜中まで人通りが絶えないそうです。軍人と警官が多いのはこの国がいかに軍備と警戒に準備しているかを物語っています」との印象を述べている。他方で、買い物の煩雑さに触れ、「まずは買いたい品物を決めるために商品陳列場の前に列を作り、そこで品物を見さだめ、値段を聞き、こんどは現金係の前に順番にならび、品物の名と数量をいって現金を支払い、伝票を受取る。そして再び品物陳列場にならんで伝票を渡し、品物を手に入れる仕組みになっていますから、買い物には三度列にならばねばなりません。／したがって、買い物には早くて七八分、長ければ一時間近くかかります。やはり日本が一番住みよいようです」との結論に達している。

石澤選手たちは28日の友好祭の開会式にはバスに乗って観客として参加した。代表団がグラウンドに入るのに2時間以上かかり、「驚く程の人数」で、続く体育大学の学生によるマス・ゲームが「目を見張るようなすばらしい体操」だったと日記に記した一方、後日の回想では改めて開会式を讃えて、「平和友好祭の開会式ほど、私の心を打ったものはありませんでした。世界中から集まった何万という人たちをモスクワ市民が迎え、口々に「平和と友情のために」と叫ぶ姿を見て、これだけの人々の熱意があれば決して再び戦争は起こるまいと思えたものでした」と述べている³⁰。一方で部屋に入って寝につくときには、「日本のこ

²⁷ 薄井憲二氏への聞き取り（2017年10月1日、京都ホテルオークラ）。

²⁸ 「本格的練習始める 友好スポーツ日本選手団」1957年7月26日付。

²⁹ 「実に多い警官、軍人 石沢選手（レスリング）のモスクワ便り 買い物するには三度行列」『新潟日報』1957年8月17日付。開会式の情報がなく買い物の記述があることから、27日夜か28日午前中に書いたと判断できる。

³⁰ 「昭和35年 異国で聴いた「君が代」に感激いっぱい」

(http://www.meijiwrestling.com/modules/pico0/index.php?content_id=42) 明治大学レスリング部 (2021年7月15日閲覧)。

とを考え愛国心があることをはっきり自分で知ることができた」と日記に記した。

スポーツ大会の開会式は、友好祭の開会式の翌日に行われた。その模様はニュース映画として日本にも伝えられ、読売新聞は「モスクワの青年スポーツ大会は、まったくすばらしい。レーニン・スタジアムのグラウンドいっばいに、機械以上の正確さと迫力を備えたソビエト青年たちのマス・ゲームがくりひろげられる。年ごとにその規模は大きくなり、趣向も深まっているようだ」と評している。石澤自身も「目を見張るすばらしさと美しさであった。二度と見るができないと思うほど、日本ではとうてい足元にもおよばないだろうと思った」と日記に記している。田中選手や諏訪選手の談話にもみられるように³¹、ここにはマス・ゲームを全体主義の象徴と見るような否定的な眼差しはない。

最終的な参加は46カ国、4,146名となった（第1回は35カ国約3,200名、第2回は37カ国約3,500名）。男子は23種目、女性は14種目、審査員は外国から185名が招かれた³²。ちなみに、前年のメルボルン・オリンピックには72カ国3,314名が参加した³³。7月15日のソ連オリンピック委員会コンスタンチン・アンドリアノフ会長の言明によれば、参加国は49カ国の予定だったが³⁴、開会式に出たのは、37カ国約2,000名であった。友好祭の開会式と同様、ロシア語アルファベットで最後の文字であるЯを頭文字とする日本は主催国ソ連の一つ前で入場した。当日の小掛照二選手は「われわれは十名のレスリング人に一番期待をかけている。彼らは好調だし練習も十分だ」とコメントしているが、この期待を裏切らない活躍を彼らは見せた。

開幕直前、上述のように、レスリングではトルコとイランが参加しないことがわかり、毎日新聞は「日ソの一騎打ち」を予想した。「諏訪の優勝は確実」視される一方、大学では実績のない石澤選手について、「バンタム級では世界の水準が落ちているので石沢がどの程度いけるかが問題だが、フェザー級の矢田も有望視されている」と述べられるのみだった³⁵。

石澤選手の日記は7月31日を最後に途切れている。目下の試合に備えるためで、その備えの中には減量も含まれていた。レスリング選手として特に辛かったことの一つはこの減量だったと石澤は聞き取りでも述べている。

5-2. レスリング・フリースタイルの試合

試合の様子は連日日本の新聞でも報道された。ここではロシア国立文書館（GARF）所蔵

³¹ 「友好スポーツ大会の印象（車中対談）諏訪選手 田中選手」（註26参照）。

³² レスリングでは当時国際連盟副会長だった八田一朗が審判長として招聘され、体操競技では「適当な人を」「審判長として招待したい」と申し出があり、日本体操協会の近藤天常務理事が派遣された。当時レスリングと体操が日本のお家芸とみなされ、ソ連からも一目置かれていたことを示すエピソードである。

³³ Melbourne / Stockholm 1956 Summer Olympics - results & video highlights (<https://www.olympic.org/melbourne-stockholm-1956>) (2021年7月15日閲覧)。

³⁴ 「49か国が参加 モスクワ・スポーツ大会」『読売新聞』1957年7月17日付。

³⁵ 「体操、レスで日ソ激突 モスクワ・スポーツ大会きょう開く」1957年7月29日付。

の記録も踏まえて確認していこう³⁶。ソ連側の資料でもレスリングでは、開会前から専門家の予想として日本、ブルガリア、ソ連の参加国の選手の活躍が見込まれていた³⁷。レスリングは日本が選手を派遣しなかったグレコ・ローマン・スタイルが先に7月31日から8月3日にかけて行われ、ここではソ連が各国を圧倒し、8つのうち7つの金メダルを奪った。フリースタイルは8月5日から8日にかけての4日間に渡って戦われた。参加国は16カ国である。前評判どおり、ソ連、日本、ブルガリアの各選手の活躍が目立った他、ハンガリーの選手も一人金メダルを獲得した。試合は予選と決勝に分かれ、以下のようなルールで競われた。

試合は12分間、ポイント（失点）制で実施される。立技（スタンド）6分間、寝技（グラウンド）2分間×2、さらに立技2分間の順序で試合を行い、フォール（相手の両肩を同時にマットに付けること）があればその時点で終了する。フォール勝ちが0点、ポイント勝ちが1点、引き分けは2点、ポイント負けは3点、フォール負けは4点が与えられ、累積6点になると予選敗退で、3人が残るまで行い、残った3人で総当たりの決勝が戦われる。そのうち、すでに予選で戦っている場合は、その予選の戦績を持ち越して、予選で戦っていない組み合わせのみ試合を実施、失点の最も少ないものが優勝となる。

石澤は第1回戦（5日）ではモハメド・ラシド（セイロン）に1分11秒でフォール勝ちした。石澤のメモによれば「開始のスタンドで両足タックルから体固めに行ったが、場外となり、又タックルをしてそのまま上四方固めでフォール勝」とある。第2回戦もフェルナンドに1分53秒でフォール勝ちした。同様に石澤メモによれば「最初のスタンドで両足タックルから、ボディプレスを掛けたが場外で二度目のタックルで持ち上げ相手の足をかり体固めでフォール勝」。フォール勝ちを続けてこの時点で失点ゼロだった。第3回戦ではソ連の強敵ウラジーミル・アルセニヤン（1934-89）と対戦した（写真）。「スタンドで両者とも二点減点された。そしてグラウンドで相手のバックに二度廻り一点リードしたが最後のスタンドで逃げ廻り結局、相手にバックポイント一点を取られ、同点となり引き分けた」（石澤メモ）。12分をフルに戦って引き分け、これで失点2点となったが、他の5名が累積6点で敗退し、5名が残った。4回戦ではくじ運よく不戦勝となり、決勝進出となった。



決勝（8日）に残った残り2名はソ連のアルセニヤンとブルガリアのエニョ・ヴィルチェフ（1936-2014）だった。総当りのうち、石澤は3回戦でアルセニヤンと対戦済みで引き分

³⁶ 試合の詳細については、以下を参照した。ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации) ф.7576, оп.11, ед.хр.4, л.48. Секция вольной борьбы СССР: Протокол Соревнований по вольной борьбе.

³⁷ ГАРФ ф.7576, оп.11, ед.хр.4, л.83.

けていたため、再度対戦することなくこの成績が決勝に持ち越され、両者ともに失点2が与えられた。残る対戦はヴィルチェフ対石澤、およびヴィルチェフ対アルセニヤンとなり、先にヴィルチェフと対戦した石澤は10分59秒でフォール勝ちした。石澤メモによれば「始めからタックルをして行ったが一本も取れなかった。だが、相手は二度減点され、グラウンドに入り足取りにかかり、二度ブリッチをしてのがれたが、四点取られたので最後のスタンドで相手を一方的にタックルをして場外に出した。それで結局、相手が逃げているので試合は中止されて勝った」。毎日新聞は「石澤は果敢にタックルで攻め、ビルチェフはそのつど場外に逃げたため規定によりフォール負けにされた。石澤もグラウンドでは足固めにあってピンチがあったがこれをよくこらえた」と決勝の模様を伝えている³⁸。ヴィルチェフとアルセニヤンは、共に勝っても失点2の石澤を上回ることにはできないため、この時点で優勝が確定した。なお、石澤のフォール勝ちはいずれも立技の時間帯であることから、立技を得意とし、積極的に立技で攻め、寝技でうまく守ったことが勝因であろう。新潟日報は石澤の談話を以下のように掲載した。「やはりソ連選手との試合が一番苦しかった。大した相手ではなく日本でなら簡単に勝てるのだが、やはり地元選手のためやりにくかった。最後の試合は足取りでちょっと危うかった」(8月10日付)。最終戦でアルセニヤンは7分20秒でヴィルチェフにフォール負けし、3位となった。フリースタイル・バンタム級の最終順位は以下の通りである。

順位	氏名	国	失点*	敗退回戦
1	石澤二郎	日本	2	決勝進出
2	ヴィルチェフ	ブルガリア	4	決勝進出
3	ウラジーミル・アルセニヤン	ソ連	6	決勝進出
4	ニイロ・キンヌネン	フィンランド	6	4回戦
5	フレディ・ケンメラー	ドイツ民主共和国	7	4回戦
6	ジルベール・デュビエ	フランス	9	3回戦
7	マルセル・シジラン	フランス	7	2回戦
8	リントン・フェルディナンド	セイロン	7	2回戦
9	モハメド・ラシド	セイロン	8	2回戦
10	エルマーニ・シャルドンス	スイス	8	2回戦

*決勝進出者の失点は決勝のもの、それ以外は予選敗退時点での失点

この優勝について、石澤自身は以下のように回想する。「異国で「君が代」を聴き、日の丸を見ていると、それまでの減量の苦しみやつらかった練習のことなどすべて忘れ、ただただ感激でいっぱいでした。今でも思い出して忘れることができません」³⁹。他の階級では、フラ

³⁸ 「世界青年友好スポーツ大会 バンタムで石澤優勝」『毎日新聞』1957年8月9日付。

³⁹ 「昭和35年 異国で聴いた「君が代」に感激いっぱい」(註30参照)。

イ級諏訪が優勝した他、フェザー級矢田、ライト級大倉、ウェルター級兼子、ライト・ヘビー級高木が銅メダル、ミドル級永井が4位、ヘビー級関が5位と全員入賞を果たしている。

10日の閉会式で、友好スポーツ大会はその幕を閉じたが、レスリング選手団は閉会式を待たずに10日からカフカースのグルジア（ジョージア）等に遠征した⁴⁰。他にも、体操団はチェコへ、バレー選手団はレニングラードへ遠征し、15日頃モスクワに集結して再びナホトカへ向かった。これはシベリア鉄道経由でナホトカに向かう友好祭代表団との日程調整をかねていた。復路もナホトカでモジャイスキー号が待ち受けていたからである。それらの遠征があった代わりに、友好祭代表団とは異なって、レニングラード観光は行っていない。

石澤は8月11日付『ソヴィエト・スポーツ』紙に寄稿し、ソ連の人々にもてなしへの感謝を述べている。

私には祖国日本に多くの友人がいます。彼らは首を長くして私の帰国を待っています。なぜかといえば、私は彼らにロシアについて話すことを約束したからです。そして私には彼らに話すことがあります。ロシア人たちはとてももてなし好きであり、私たち日本人も含めて、すべての外国人を暖かく迎えてくれるということです。私は日本の若者に、私の新しい出会いを語るつもりです。[…]

私たちはクレムリンも赤の広場も訪れ、ロシアの町のいくつかの通りを自由に歩き、どこに私たちが行っても、どこでも親切で感じの良い人々に会いました。どんなモスクワの人々も私たちに好意と敬意を持って接してくれました。私はこうしたことも、日本の友人たちに話すつもりです。⁴¹

ソ連の人々が好意的に迎えてくれたことへの感謝とソ連についての情報を多くの人が待ち受けていることがはっきり伺える。

6. モスクワから戻って

ナホトカに戻ってからは再びモジャイスキー号に乗船して、友好祭の代表団とともに一行は新潟に向かった。8月25日午後には新潟港入りし、検疫を終えると19時過ぎに上陸、8月26日午後7時に新潟から上野駅に到着し、翌27日午後4時より、岸体育館で解団式が行われ、友好スポーツ大会日本代表団はその役目を終えた。

⁴⁰ YouTube 上には「1957 год - Соревнования Осетинских и Японских спортсменов по вольной борьбе」と題して、スタジアムでの試合の様子を3分28秒で紹介する映像がアップロードされている (<https://www.youtube.com/watch?v=8ERzyYdkNVU>) (2021年7月15日閲覧)。

⁴¹ Исидзава Дзиро. Приезжайте к нам Японию // Советский спорт, 11 августа 1957 г. 実際には8日ないし9日の談話をまとめたものであろう。

新潟到着直後、石澤は談話を残している。「ソ連、ブルガリアのレベルの高いのには驚いた。すでに米国などは相手にならないだろう。日本の技術が全部研究しつくされたとは思わないが、次回のオリンピックには新しい技術を身につけてゆかないと。ソ連の観衆は目が高く、不正確な判定に対しては足を踏みならして抗議するが、ファンもレフェリーも共産圏の諸国には点が甘かったようだ」⁴²。

他方、毎日新聞に掲載された東団長の総括は極めて興味深い。「友好スポーツ大会は予想以上の大規模のもので、その豊富な施設など驚嘆に値する。しかし運営の面では不なれで、手違いも多くあった。出発前にはこの大会が純粋なスポーツ大会かどうか疑点があったが、ソ連でも平和祭とこのスポーツ大会とははっきり区別し政治色はみとめられなかった。将来も参加すべきだと思う。日本の健闘ぶりは非常な歓迎と声援を受けた。レスリングにしても日本、ソ連、ブルガリアの三つどもえだし、体操は日本とソ連の一騎打ちで、日本の参加が大いに大会を盛り上げた」⁴³。

当然のことながら、石澤選手はたちまちのうちに次回ローマ・オリンピックの有力候補に踊りだした。1957年末の評価として「アマレス全日本ランキング」ではバンタム級一位にランクされた⁴⁴。また、新潟県体育協会では昭和32年度優秀選手に選出された⁴⁵。こうした期待を背負って望んだその後のレスリング人生で、1959年には全日本学生選手権（フリースタイル・バンタム級）で優勝しており、十分にオリンピック代表の資格はあった。しかし代表入りは残念ながら逃している。「この時オリンピックに出ていれば、また別の人生があったかも知れない」と石澤は回想する。明治大学を卒業した石澤は、薄井憲二の紹介で金十証券に就職、62年には社会人選手権で優勝（フェザー級）しているが、まもなくレスリングは引退し、証券マンとして第二の人生を送った。退職後の現在は、庭師としてときおり近所の庭の手入れの仕事をこなしながら、悠々自適の第三の人生を送っている。日本経済新聞を一通り読むのは証券マン時代からの、日記をつけるのはモスクワ大会当時からの習慣だという。

おわりに

総じて、友好スポーツ大会には、国際社会に復帰して間もない日本人が（友好祭の芸術部門でもそうであったように）ソ連で暖かく歓迎されたことが伺えるエピソードが多い。そして、ロシア語の壁や組織運営の不手際を別とするならば、オリンピックよりも気楽に参加して腕試しのできる大会として、スポーツ関係者に肯定的に受け止められたことは確かである。

⁴² 「レベルが高いのにびっくり」『新潟日報』1957年8月26日付。

⁴³ 「スポーツ代表帰京 東団長談 今後も参加したい 青年友好祭」1957年8月27日付。

⁴⁴ 『日刊スポーツ』1958年2月16日付。

⁴⁵ 「高田高チーム（体操）など県体育協会 表彰優秀選手ら決める」『新潟日報』1958年2月12日付。

結びとして確認しておくべき点の1つは友好祭との相違、イデオロギー色である。友好祭とスポーツ代表団には明確な待遇の区別があり、船室や列車のクラスに現れていたように、大衆とエリートのような待遇の相違があった（実際にはいずれの代表も、日本の青年の「エリート」であったにせよ）。しかし同じ船に乗船し、同じ列車に連なっていたゆえ、交流がなかったわけではなかった。洋舞代表の薄井憲二は、レスリング代表の石澤とモジャイスキー号で知り合ったし、また体操代表にバレエの基礎を授けたことを回想している⁴⁶。他方で、平和友好祭には政治色があり、友好スポーツ大会にはない、というのが日本政府の見立てであったはずだが、実際には友好祭にも政治色は皆無であり、社会主義イデオロギーが前面に出る機会はなかった。その代わりに全面に出ていたのは平和・友好であり、それは友好スポーツ大会にも共通のものであった。石澤の回想にあるように、平和や友好は戦後10年足らずの当時、普遍的に受け入れられる理念であった。

2点目は新潟市・新潟港が果たした役割である。新潟港の周辺に集った人々は、モジャイスキー号の乗務員と交流し、生きたソ連の人々、ロシア人に接していた。そこで一見無愛想な人々が話し出すと愛想が良いことに気がつく。こうした観察は上述したように、「冷たいソ連」「お人好しのロシア人」というよくある記述を想起させる。ソ連に行ったわけではない市井の人々がこのように交流していた事実は貴重に思われる。

これとも関連するのが3点目、石澤選手らが見聞きしたソ連の実情である。ゴミ一つない通り、日本にないような立派なモスクワ大学の建物、スタジアム、当時の日本には真似できないような壮大なマス・ゲーム…各々が全体主義的な要素と否定的に捉えられず、讃えられた。その一方で、用を足すのをやめたくなるようなトイレ、人々の質素な姿、煩わしい買い物仕組みや愛想のないスチュワーデス、軍人と警官に満ちた街など、肯定し難い要素も十分に観察されている。こうした見聞の結果、石澤は愛国心を感じ、そして「やはり日本が一番住みよい」という結論に達している。もう一つ、彼の観察で特筆すべきはよく歌い、よく踊るソ連の人々の姿である。新潟港での交歓風景でも歌が重要な役割を果たしていた。これは「愛想の良さ」と同様に、シベリア抑留経験者、典型的には井上頼豊や高杉一郎の回想に見られる要素であり⁴⁷、うたごえ運動にも関わる映画《シベリヤ物語》でも描かれた姿であった。こうしてみるならば、友好スポーツ大会は、平和友好祭と同様に、日本人のソ連／ロシア（人）理解の系譜の中で重要な一コマをなしていると言えるのではないだろうか。

⁴⁶ 薄井憲二氏への聞き取り（2017年10月1日、京都ホテルオークラ）。

⁴⁷ 「当時、歌と踊りが本当に国民全体のものになっているという証に三日おきぐらいにぶつかりました。／三人集まると合唱がはじまるんです」、『聞き書き井上頼豊 音楽・時代・ひと』音楽之友社、1996年、113。「ロシア人が戸外で三人集れば必ずはじめる合唱の音が、風にちぎれて私のところまで届いてくる」、高杉一郎『極光のかげにシベリア俘虜記』岩波文庫、1991年、60。

（うめつ のりお 教育推進機構非常勤講師）

（はんや しろろ 愛知県立大学外国語学部教授）

